

# 防大生の社交教育と榎校長

## 社交ダンスと辻政信

白石 博司 陸自66

はじめに

日本開国の当時、日本政府は国賓や外国の外交官を接待するため、外国との社交場として「鹿鳴館」を建造した。

ここでの舞踏会が外交の潤滑油、推進役として重視された。

計画者は、当時の外務卿（大臣）井上馨である。鹿鳴館の開館は11月29日（井上馨の誕生日）で、「ダンスの日」として定められている。

皇族や上流社会のご婦人だけでは対応できず、ダンスの訓練を受けた芸妓が舞踏会の「員数」として動員されたり、高等女学校の生徒も動員されていたと言われている。

終戦後、進駐軍向けのダンスホールが多数開かれ、一般の人にもダンスの機会が拡大して、若い男女の出会いの場としての社交ダンスが一時期流行したが、1960年代からディスコダンスの誕生とともに、ペアダンスが衰退し、ダンスホールも減少、現在は東京都内で生演奏のダンスホールは2軒のみとなったと言われている。

榎智雄初代校長とアカシア会（ダンス委員会）

占領が終わり、防衛大学校（以下防大）初代の学校長である榎智雄氏は昭和31年春、英米仏の士官学校の実態把握を主眼とした教育視察を実施され、士官学校における学生生活の一部として多数のクラブ活動が重視され、特に士官候補生の将来の軍人社会における「社交」の重要性を認識し、その教育

のための施策が目止まられ、防大の校友会の設立を積極的に進められた。特に、米国の士官学校では、学生が校外に出るのを許されるのは、年間を通じて夏期とクリスマスの2度の休暇だけであり、「社交」を実践する機会

はほとんどなかった。そこでとられた施策は、校内にグラント・ホールと呼ぶ建物を作り、この建物の区画された一部に立派な家具や調度品、壁や窓に装飾が施された広い部屋があり、品格のある年配の婦人（と

もに將軍の未亡人）が2名おられ、「ホステス」と呼ばれ、学生の社交場の世話をしている。

外出できない代わりに、家族の訪問が多く、この訪問家族は「ホステス」

の賓客となり、行き届いた取り扱いは受けるとともに、学校付属の旅舎に宿泊し、学友も含めてこのグラント・ホールで団欒を過ごし、礼儀作法等も学ん

でゆくのである。

また、学校の敷地内には、多くの教官家族も住んでおり、学生がその家族に招待される機会も多くあるのである。

しかし、3千余の学生の社交機会をそれらで満たすことは困難であり、この欠如を補うため、各士官学校は多くの週の土曜日の晩に、校内においてダンスパーティーを開催計画する。

ダンスの相手は、ウエスト・ポイントでは、学校を中心とした半径20マイル以内の女子校と交渉して、士官候補生に適する相手の推薦を依頼して精選する。

これら学校では、在校中の結婚は許されないので、卒業直後に学校の礼拝場に何組もの結婚式が殺到すると言われている。アナポリスの場合、60組もの多くを数えることもあると言われている。これらの視察から榎校長は「社交ダンスを通じて、正しい男女の交際、礼儀、社交性の場を与えるという目的」

で「アカシア会」の設立を推進され、自ら名誉会長に就任された。

### 榎校長と辻政信

発足間もない防大では、第一期生の強い要望によりダンスパーティーの許可願いが出されたが、当時の指導官は旧軍出身が主力で、大方の指導官は反

対であった。

しかし、このことを知った榎校長は、「将来の幹部はマナーを体得し、女性に対する対応を心得ていなければならぬ。学生にダンスを行わせて指導する必要はある。大いに結構なことだ」と主張し、部内外の反対を押し切って、社交ダンスを奨励される方針を打ち出され、自ら「アカシア会」の名誉会長になられた。

パーティー会場では「これからの自衛隊の幹部は「剛」のみを備えただけではいけません。社交マナーを解する心がけも大切」としばしば話されていた。

第一期生卒業の直前の昭和32年12月14日、アカシア会が計画し、東京ステーション・ホテルでダンスパーティーを開いた。

元陸軍大佐・大本営参謀の辻政信衆議員の令嬢にも招待状が届いたことから、辻議員は受付も通さず、「竹下いるか」と会場に乗り込んだ。

### 「竹下」とは、当時、防大幹事の職

にあった元陸軍中佐の竹下正彦陸将補である。

終戦時の陸軍省軍務局軍務課員で、陸相・阿南惟幾大将の義弟、阿南陸相の割腹にも立ち会った人物である。

その様子を竹下氏は、「……果然辻政信代議士が現われ、私を呼び出して、

『防大生がダンス会を開くとは何事だ、君が括然としてそれを許し、この会に参加しているとは何事だ』と詰問し、私が『防大生がクラブ活動としてダンスパーティーをもつことを悪いとは思わない』と返答するや、興奮の末、いずれ国会の問題としてとり上げ、議場で可否を決着しようといつて引き上げたのである』と述べている。

その国会審議は、昭和33年3月7日の第11回衆議院内閣委員会で横校長も説明員として招致された。簡略にその模様を紹介する。

●辻委員・校長にお伺いしますが、防大の中にアカシア会というダンス部を作っておられますが、ダンスは自衛隊の幹部に必須の社会人の教養という意味でお作りになったのか。

●横説明員・これは防大内で少数の者がやっており、大学校といましては、婦人との交際というものも教育のうちの大いなる部分を占めると思っています。

●辻委員・昨年の12月14日、東京駅で防大の制服を着た学生が大勢待ち合わせしており、若い女性を連れて、腕を組んで食堂に入っていた。現場へ行ってみると、ステーション・ホテルの2階を借り切つて、約200名の防大生が制服を着て、腕から肩を露出した若い女性を抱いて、薄暗いホールで踊つており、それがまことに上手です。神宮外苑の観閲式の防大生の行進を見ましたが、服装はよろしい。しかし、訓練は練馬部隊の一般兵の方が充実していると私は感じた。教練は下手だがダンスが上手で防大の目的を達成しておると思うのか。

私は今ここでダンスの良し悪しを議論するのではなく、あなたが言われたように、女性に対する交際を教えるのも防大において必要だといわれますが、問題は12月14日、慶應、早稲田、明治、東大の学生の諸君はあの寒い年の瀬を、アルバイトをやつて夜おそくまで働いておるのに、30万円の税金防大生1人に必要な年間経費をもらつて特殊の目的に訓練をされておる防大の学生と校長、幹事以下40人の職員が、人の目をはばからずに、あの東京の表玄関を借り切つて、7万円の金をかけてダンスパーティーをやるということが的はずれでないとお考えになるのか。

●横説明員・14日には学生約200人足らずのものが参加し、我々は周到な準備をして望みました。大切なことは、いい相手を選ぶ、そのために横須賀地方の婦人会等の援助を受けました。

時期・場所は1年に1度、東京は学生も多いので、その姉妹あるいは友人

というものが集まり易いだろうということですが、そのやり方を立派にやらしてやるうと思つて来ておつたのであります。

そしてこの行事が、全体の訓練に対してどういう影響を与えるかという点、これは決して悪い影響は与えておらないと思います。学生は立派に訓練も体育もやり、卒業した暁には立派な自衛隊員になり得るところの資格を備えて出ていったと私は考えております。

横校長は、各国の士官学校視察の結果から、ダンスの効果を実感され、強烈な辻政信衆議院議員の攻撃を恐れることなく撃退したものと思える。

筆者が防大に入校したときの室長が、アカシア会の会長で、当時の活動を伺うと、校内には練習場所がなく、横須賀市内で会場を借用し、そこで練習をしていた。

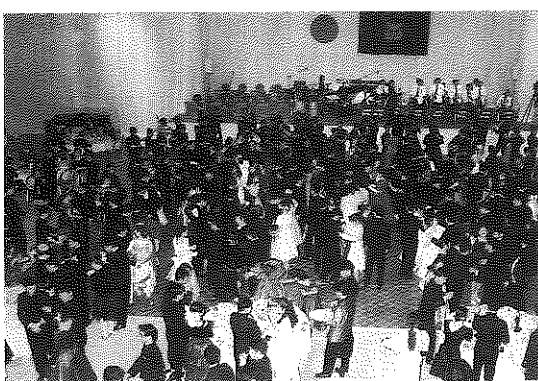
会としての行事は、年に2度のパーティーが主体で、会場決定(磯子プリンスホテル等)からパーティーの運営まで、すべて会員が実施し、学校長以下を招待して実施したとのことであつた。

当時は、男子校であつた防大は、パーティーを探すのに苦労し、近傍の大学等に手紙で参加を依頼するのだが、あ

まり良い返事はもらえなかつたようである。

筆者も3学年から、アカシア会の会員であつたが、専ら実践を追及し、横須賀に唯一存在したダンスホール「グーサイド」に通い、アカシア会の目的を追求していた。

現在のアカシア会は、最近の「MAY MOR No.14」あるいはインターネット等で紹介されているが、卒業パーティーだけでなく、開校際等の各種行事に、デモンストレーションとして招聘されるとともに、都内の各大学で盛んに行われている競技ダンスに積極的に参加しているようである。



防大43期生卒業アルバム